

日本英語学会第30回記念大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月10日午後)

司会 上田由紀子 (秋田大学)

“Reconstruction into Parasitic Gaps”

Jun Abe (Tohoku Gakuin University (Part-Time Lecturer))

This talk aims to provide a new analysis of the reconstruction paradigm with respect to Conditions A and C in parasitic gap constructions. It is proposed that the paradigm is best analyzed under Chomsky's (1993) LF mechanism for operator-variable chains with the following two assumptions: (i) the QR-like operation which is part of Chomsky's LF mechanism leaves *pro* behind rather than trace and (ii) Lebeaux's (2009) Single Tree Condition, which requires that licensing of such dependent elements as anaphors and bound variables is conducted in terms of a single position of a chain in a single representation such as LF. With these assumptions, it is demonstrated that the impossibility of reconstruction with respect to Conditions A and C is attributed to a violation of weak crossover.

[1] Chomsky, N. (1993) “A Minimalist Program for Linguistic Theory,” *View from Building 20*. [2] Lebeaux, D. (2009) *Where Does Binding Theory Apply?* MIT Press, Cambridge, MA.

“A Unified Analysis of Expletives and Do-Support”

佐藤元樹 (東北大学大学院)

本発表では、虚辞や支えの *do* (Do-support) など意味内容を持たない語彙要素や随意的な要素に対する統一的な分析を提案する。従来、虚辞 *there* や支えの *do* は、それぞれ TP 指定部、T 主要部に挿入されると仮定されてきた。本発表では、Chomsky(2001[1], 2008[2])等のフェイズに基づく統語演算のもとで、これらの

意味内容を持たない要素は、vP フェイズの統語演算が終わった後で、TP 領域ではなく、vP フェイズの端(Edge)に、挿入されると提案する。具体的に、虚辞 *there* は vP 指定部に、支えの *do* は v 主要部に挿入されると論じる。また、CP フェイズにおいても、フェイズの端に意味内容を持たない要素が挿入されることを虚辞 *it*, 補文標識 *that* 等から論じ、意味内容を持たない要素や随意的な要素は、フェイズ理論から統一して分析できることを示す。

[1] “Derivation by Phase.” [2] “On Phases.”

“Two Types of Main Verb Inversion in English”

荒野章彦 (東北大学大学院)

本発表では、英語の主動詞倒置構文(Main Verb Inversion)である引用句倒置構文(Quotative Inversion)と場所句倒置構文(Locative Inversion)について論じる。引用句倒置構文では、動詞に後続する名詞句が非頭在的に TP 指定部へと A 移動するのに対し、場所句倒置構文では、TP 指定部を空の虚辞 *there* が占める(Postal 2004 [1])ため、名詞句は A 移動しないと提案する。

この提案から、繰り上げ述語が選択する経験者(experiencer)項との共起制限に関して、従来指摘されてこなかった構文間の対比を説明することができるかと論じる。経験者項が非頭在的 A 移動の介在要素となり、引用句倒置構文のみが排除される。さらに、付加疑問文(Tag Question)に関しても、構文間の対比を新たに指摘し、本発表の提案が支持されると論じる。

[1] *Skeptical Linguistic Essays*, Oxford University Press.

第二室 (11月10日午後)

司会 丸田忠雄 (東京理科大学)

「It is that 構文の談話機能：推論・指定・対比の観点から」

五十嵐啓太 (筑波大学大学院)

英語の it is that 構文(e.g. It is that he knew too much (Declerck (1992:219 [1])))は、先行研究で「先行文への説明を表す」など、談話機能がいくつか指摘されている。しかし、従来の分析では説明できない例も多く、it is that 構文の中心的な談話機能は未だ明らかになっていないといえる。また、事実観察の点でも不十分であり、例えば that 節内で否定構成素前置(e.g. It's just that never in his life has he kept his word.) が起きる事実は見過ごされてきている。本発表では、Declerck (1992)の指定文分析を基に、「it is that 構文は、ある集合から命題を選択するプロセスを it is that が明示することで、選択された命題とされなかった命題の間の対比性の含意を生じさせる談話機能を持つ」ということを主張する。

[1] “The Inferential It Is That-Construction and Its Congers,” *Lingua* 87.

「英語法助動詞における主観性と遂行性の一考察：Verstraete(2001)の分析の批判的検討を通して」

眞田敬介 (札幌学院大学)

英語法助動詞の意味や用法を扱う際、主観性 (subjectivity) や遂行性 (performativity) に言及する研究が多い (Palmer 1990 [1]など)。その中でも Verstraete (2001 [2])は、英語法助動詞の主観性を「法的遂行性」という概念を用いて規定する独自の立場を取る。法的遂行性とは、「発話の命題内容に対するある特定の立場を明らかにすること」(2001: 1517) と定義される。この遂行性は主観的モダリティに関与し、客観的モダリティには関与しない (ibid.)。

この分析には二つの重要な特徴がある。第一に、英語法助動詞の主観性を法的遂行性に還元することと実質的に等しい。第二に、法助動詞を含むモダリティにおける主観性の議論でほぼ必ず言及される Lyons (1977 [3])の主観性に、ほとんど依存していない。本発表は、Verstraete の分析の批判的検討を通して、英語法助動詞における主観性、遂行性、及びこの

両者の関係をどう捉えるべきか議論する。

[1] *Modality and the English Modals*, Longman.
[2] “Subjective and Objective Modality,” *Journal of Pragmatics* 33: 1505-1528. [3] *Semantics* 2, CUP.

「身体行為構文の受動文と談話機能」

小葉哲哉 (麗澤大学 (非常勤))

本発表では、*crane one's neck*, *nod one's head* のような、身体部位名詞を伴う述語表現を「身体行為構文」と呼び、その受動化に課される制約を考察する。本構文は、「動作主が自らの身体部位を動かし、何らかの伝達行為や態度を表す」表現である。多くの先行研究では、この種の表現は受動化できないと観察されている (*Her eye was winked by Linda. (Levin 1993 [1]) など)。しかし、BNC などコーパスでの使用例を見ると、受動化された実例が実際には見つかる (Heads were nodded in sympathy. (BNC))。

本発表では、まず当該構文を意味的特徴に基づいて「行為型」と「状態変化型」に分類し、その上で受動化が容認可能となる2つの条件を意味・語用論的観点から提案する。また、日本語の対応する構文と比較し、本発表で提案する条件の妥当性を検討する。

[1] Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations*, University of Chicago Press.

第三室 (11月10日午後)

司会 藤田耕司 (京都大学)

「主要部移動と句構造構築」

中村太一 (東北大学)

本発表では、Bare Phrase Structure (BPS) 理論 (Chomsky (1995) [1]) が主要部移動に対して持つ帰結について考察する。BPS 理論の下では、移動を受けた要素が主要部である場合、移動先で自ら投射することも、句として指定部を占めることも原理上可能である (Chomsky (2008) [2])。これらの派生の可能性は、これまで wh 移動が関与する諸現象を通して探求されてきた (Donati (2006) [3])。本発表では、これまであまり焦点を当てられ

ることのなかった英語の事例に基づき、限られた環境では(助)動詞・時制システムにおいても、これらの派生が存在することを明らかにする。さらに、なぜこれらの派生が可能となる環境が当該システムでは限られるのか、その要因について考察する。

[1] *The Minimalist Program*. [2] “On Phases.” [3] “On WH-Head Movement.”

「日本語の「ている」構文の統語構造」

神谷 昇 (千葉大学 (非常勤))

本発表では、「走っている」のような日本語の『「ている」構文』の統語構造について検討する。この構文の解釈には、「動作の継続」と「結果状態の継続」の2つがあるが、本発表では、解釈の違いはこの構文中の「いる」の位置と関連があることを示す。より具体的には、「始める」のような相動詞は H(igh) Asp に生起する場合と L(ow) Asp に生じる場合があるとする Fukuda (印刷中) の提案を踏まえ、この構文が動作の継続を表す場合には「いる」は H-Asp に、また、結果状態の継続を表す場合にはそれは L-Asp に生起することを提案する。その上で、「ている」に先行する動詞の種類に応じてこの構文の解釈が異なること、特定の副詞(句)が生起した場合にはこの構文が動作の継続の解釈を受けること、さらに、愛媛県宇和島方言において動詞に「よる」が後続する場合には動作の継続を、「とる」が後続する場合には結果状態の継続の解釈を受けることについても論じる。

Fukuda, Shin. (印刷中) “Aspectual Verbs as Functional Heads: Evidence from Japanese Aspectual Verbs,” *NLLT*.

“Embedded Topicalization in Irish” (E)

Hideki Maki (Gifu University) and Dónall P. Ó Baoill (Queen’s University Belfast (Professor Emeritus))

Chung and McCloskey (1987 [1]) were the first researchers to examine and analyze examples of embedded topicalization in Irish. In this paper, we will investigate the properties of Irish topicalization in more detail, and claim (1) that the Highest Subject Restriction does not apply to the

resumptive pronoun involved in Irish embedded topicalization, (2) that both [-Q] and [+Q] COMPs may bear a [+TOPIC] feature in Irish, and the head positions in charge of embedded topicalization are parameterized among languages, (3) that the difference in the head positions in charge of embedded topicalization lies in the relation between the COMP and the INFL, and (4) that the order of a topic phrase and a wh-phrase in CP SPEC is fixed, which suggests a restriction on the relation between the head and the position of the element in its SPEC.

[1] Chung, Sandra and James McCloskey (1987) “Government, Barriers, and Small Clauses in Modern Irish,” *Linguistic Inquiry* 18, 173-237.

第四室 (11月10日午後)

司会 中西公子 (お茶の水女子大学)

「素性継承に基づく英語結果構文の分析」

藤森千博 (弘前大学 (非常勤))

本発表では、英語結果構文に CP としての小節構造を仮定し、C が持つ ϕ 素性が小節主要部に素性継承されないため小節主語が CP 指定部へ移動し、さらに格照合のため主節 vP 指定部へ移動するとした藤森(2012)[2]の主張を概観した後、(i)他動詞結果構文でなぜ post-verbal DP は主節目的語としてではなく小節主語として生起するのか、(ii)非能格動詞結果構文においてなぜ post-verbal DP は対格を照合されるのか、について考察する。(i)については、小節主語が移動の過程で主節他動詞から θ 役割を付与され、さらに対格を照合されることによって主節目的語として振舞うことを指摘する。また(ii)に関しては、VP が状態変化を表すには VP 内に目的語が必要であるとする Dowty (1979)の分析を基に、非能格動詞であっても状態変化を表すには VP 内に目的語を取る必要があると論じる。

[1] Chomsky, N. (2008) “On Phases” in R. Freidin et al. (ed.) *Formal Issues in Linguistic Theory*. [2] 「結果構文の統語的一考察」『弘前学院大学文学部紀要』48. [3] Hornstein, N. (1999) “Movement and Control,” *LI* 30.

「Differentの内部解釈のAgree分析と右方節点繰り上げ構造」

外池滋生 (青山学院大学)

[1]以来、例えば[2]では、Bob and Alice attend different classes に見られるような内部解釈には different/same が Bob and Alice をその作用域にもたなければならぬと想定し、その上で、[2] は Alice bought and Beth read different books のような右方節点繰り上げ構文(RNR)には削除分析と多重支配分析の両方が必要であると主張している。本発表では、そのような作用域条件では[1]のデータを正しく取り扱うことができないことを示し、代案として Probe-Goal による Agree 分析を提案し、作用域が関係している部分については、随意的な右方付加移動(顕在的数量詞繰り上げ)を提案する。そして RNR については、多重構造を等位接続構造に変換する側方移動分析だけで十分であることを示す。

[1] Carlson, G (1987) "Same and Different," *Linguistics and Philosophy*. [2] Barros, M. and L. Vicente (2011) "Right Node Raising Requires Both Ellipsis and Multidomination," *U. Penn Working Papers in Linguistics* 17.

「先行詞包含型削除文の構造および解釈について」

丁 文文 (筑波大学大学院)

先行詞包含型削除 (Antecedent-Contained Deletion : ACD) における遡及問題は以前、LF における数量詞繰り上げ (QR) によって解決されると考えられた。しかし、移動のコピー理論によれば、移動操作が、元位置に同じコピーを残すので、削除される VP が元位置にあることを変えることができなくなる。この問題の解決として、Fox (2002)で提案された後併合分析と Chomsky (2004)で提案された追加思考 (Afterthought) 分析があげられる。本論はこの二つの先行文献を概観した後、新たな提案として分離関係節 (Split Relative Clause) 分析を提案する。具体的には、ACD を関係節と見なし、外主要部と関係節は離れた位置で生成する。すなわち、外主要部は先行 VP の中に目的語として生成されるが、関

係節は先行 VP を含む v*P の付加位置で生成される。この構造の元で正しい解釈が得られることを示す。

[1] Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy." [2] Fox, Danny (2002) "Antecedent-Contained Deletion and the Copy Theory of Movement."

第五室 (11月10日午後)

司会 土橋善仁 (新潟大学)

「Move without Agree」

辰己雄太 (大阪大学大学院)

Chomsky(2000[1])は、統語部門における Move という操作は Agree と EPP 素性の組み合わせによって生じるものであると提案し、この提案はその後の多くの研究で採用されてきた。しかし、この Move を構成するとされる要素のうち EPP 素性に関しては、その存在の仮定が本当に妥当なのかどうかについて議論があり、完全な結論は出ていない。また、Agree という操作に関しても、位相不可侵条件に対する振るまいが Move に見られるものとは異なっているという観察があり、もし Move が常に Agree を含んでいるのであれば、この位相不可侵条件に関する相違についてなんらかの説明が必要になる。これらの議論を踏まえ、本発表では Move が Agree を含むとする仮定では説明できないように思われる現象を扱い、Move は Agree とは独立した操作として存在し得ると結論づける。

[1] "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by R. Martin et al., 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

「Feature Inheritance and Four Types of Argument Structure」

北田伸一 (東北大学大学院専門研究員)

本発表の目的は、Chomsky (2008)の素性継承メカニズムを援用して四種類の項構造を提案することである。Chomsky (2008)は、全ての解釈不可能素性がフェーズ主要部に導入され、その後、派生的に補部の主要部に継承されると主張した。例えば、解釈不可能な ϕ 素

性は*v**に導入され、その後、*V*に継承される。本発表では、主題役割が解釈不可能素性(θ 素性)であると仮定し、外項の θ 素性($E\theta$)と内項の θ 素性($I\theta$)の両素性が*v**に導入されると提案する。この提案と素性継承メカニズムとの連動により、 θ 素性が*V*に継承される。その継承の仕方として、(1) $I\theta$ が*V*に継承される、(2) $E\theta$ が*V*に継承される、(3) 両方が*V*に継承される、(4) 両方が*v**に留まる、という四種類の論理的可能性が生じる。これら四種類の項構造が、(1) 能動文、(2) 受動文、(3) *it*外置文、(4) 再帰化文により支持されることを論証する。

“Distributive Binding and Two Types of Binding Theory in Syntax”

石野 尚 (関西学院大学研究員)・
浦 啓之 (関西学院大学)

現行統語理論には、*predicate*の項構造に基づいて束縛関係を決定する Reflexivity 理論 (Reinhart and Reuland (1993 [1]))と素性照合の Probe-Goal を用いて束縛関係を決定する Agree 理論 (Gallego (2010 [2]), Reuland (2011 [3])等)の2つが拮抗して提唱されている。本発表の理論的目標は、再帰代名詞の ϕ -feature の defectiveness が両理論の適用条件を決定することを明らかにし、双方が UG 内に構成される統語的束縛の理論として完全相補的であることを示し、其々の理論内の適用範囲を明確化することである。これを立証する為、分配束縛 (Distributive Binding (DB)) の分析を行うが、DB の統語的特徴を解析しその統語メカニズムを明示することが本発表の経験的目標である。DB とは、“^{OK}[John と Bill]が自分自身を批判した”において、単数形再帰代名詞 自分自身が等位接続名詞句内其々の名詞句 John と Bill を分配的に指示対象とし得る現象のことであり、英語では“*[John and Bill] criticized himself.”のようにDBは容認されない (Heim, Lasnik and May (1993 [4])). 更に本発表では、言語間の DB の容認性の差異を広く捉え得るパラメターの提示も目指す。

[1] “Reflexivity,” *Linguistic Inquiry* 24. [2] “Binding through Agree,” *Linguistic Analysis* 34. [3] *Anaphora and Language Design*, MIT Press.

[4] “Reciprocity and Plurality,” *Linguistic Inquiry* 22.

第六室 (11月11日午前)

司会 菅原真理子 (同志社大学)

“Main Stress Assignment in English Words”(E) Eiji Yamada (Fukuoka University)

In this presentation, I attempt to account for the main stress assignment in English words within the framework of “Positional Function Theory” [1].

In Yamada (2010), the subsidiary stress assignment of words in American English is accounted for using 16 postulated Positional Functions and their interaction. In this presentation, using the same framework I examine the *main* stress assignment of American English words, showing that it can be accounted for in a comparatively simple way.

A small number of Positional Functions are necessary, along with *Extrametricality* triggered in the case of English. The Positional Functions postulated for main stress assignment are *Heaviness*, *Bounded Binarity*, and *Rhythmic Adjustment*.

[1] Yamada, Eiji (2010) *Subsidiary Stresses in English*, Kaitakusha, Tokyo.

“The Standards of Gradable Adjectives in Child Japanese”

Koji Kawahara (Fuji Women’s University)

Our experiments reported in this paper explore how contexts influence the interpretations of Gradable Adjectives (GAs) and try to determine whether children correctly establish the standards each GA has. Specifically, our empirical focus is on the scale of maximum standard GAs. We show that child Japanese can be different from adult Japanese in some maximum standard GAs. We argue that the difference lies in the properties of maximum standard GAs, whereby the scale of some maximum standard GAs can be shifted. Our results indicate that by 6 years of age children are sensitive to the

meanings of GAs and they have developed a core scale structure of GAs, but the acquisition of some GAs is dependent on learning experiences, not necessarily attributable to the innate language faculty.

[1] Syrett, Kristen, Kennedy, Christopher and Lidz, Jeffrey (2009) "Meaning and Context in Children's Understanding of Gradable Adjectives," *Journal of Semantics* 1. 1-35. [2] McNally, Louise (2011) "The Relative Role of Property Type and Scale Structure in Explaining the Behavior of Gradable Adjectives," *Vic* 2009, ed. by Nouwen, Rick, van Rooij Robert and Sauerland, Uli, 151-168, Springer, Berlin.

司会 本多 啓 (神戸市外国語大学)

「経験の have 構文の認可条件」

武内梓朗 (筑波大学大学院)

本発表は経験の have 構文を扱う。この構文においては、主語が have に後続する連鎖 (補部) が表す事象に影響を受ける。補部内に She_i had [her_i camera confiscated by the police]_j のように主語と同一指示の要素が明示されている場合が多い。このような例に加えて、He had [students walk out of class] today_j のように補部内に主語と同一指示の要素が明示されていない例も知られている。

このように経験の have 構文の認可には、明示的であれ非明示的であれ、主語と補部に同一指示的な関係が必要である。先行研究はこの関係を統語的な束縛関係とする研究と、意味的・語用論的な関連とする研究に二分される。本稿はこれまでに批判の対象とされていない前者の立場を採る Harley (1997) の批判的検討を目的とし、認可条件として主語と補部間の意味的・語用論的な同一指示的関連を主張する。

Harley, Heidi (1997) "Logophors, Variable Binding and the Interpretation of Have," *Lingua* 103, 75-84.

「ドメイン・シフトと英語可算名詞の不可算転換について：ニオイ領域のネコ」

小寺正洋 (阪南大学)

認知文法では可算・不可算の区別は指示対象の有界性にあるとされ、可算から不可算への転換について Langacker (2008:143-144 [1]) は以下の2つのパターンを挙げる。1) 指示対象が個性性を喪失し均質体に変化する場合。2) 指示対象の有界性が無意味である場合。本発表では 2) に関してニオイ領域へのドメイン・シフトが引き起こすとされる不可算転換について、英語母語話者 (英・米・豪 25 名) への容認度調査結果を基に考察する。

「ネコのニオイ」を指示する 'cat' は *small domain* で非有界として概念化され不可算転換が期待されるが、可算・不可算用法ともに容認度は高い。一般的な「ネコのニオイ」の意味では両用法間に有意差は見られないが、ニオイ源のネコの具体性が増すに従い可算用法の容認度が有意に高まる。ニオイ領域での可算用法の容認を説明するにはドメイン・シフトの考え方だけでは不十分であり、伝達意図・内容も考慮する必要があることを主張する。

[1] *Cognitive Grammar*, OUP.

第七室 (11月11日午前)

司会 新沼史和 (盛岡大学)

「phi 素性の“copy”について」

大高 茜 (津田塾大学大学院)

Chomsky (2008 [1]) における C から T への inheritance では、C の phi 素性は最終的に T のみに残る。これに対し本発表では、Takeuchi (2010 [2]) 等の先行研究を踏まえ、C の phi 素性は、T に copy される場合と、C のみに残る場合と、T のみに残る場合とがあると提案する。これを、C の phi 素性が T に随意的に “copy” されると言うこととする。このように想定することによって、日本語の主語-目的語繰り上げ構文・目的語コントロール構文の補文主語の移動を説明することができる。すなわち、当該構文において、補文の C の phi 素性が “copy” され、C、T 両方が phi 素性を有する場合に、補文主語は補文の Spec-vP から Spec-TP、Spec-CP を経由し、最終的に主節の Spec-VP へ A 移動する。本発表ではさらに、

当該構文において、補文の C、T 両方が phi 素性を有する場合に、なぜそれらが格付与に関与しないのかという問題についても検討する。

[1] “On Phases.” [2] Takeuchi, Hajime (2010) “Exceptional Case Marking in Japanese and Optional Feature Transmission,” *Nanzan Linguistics* 6, 101-128.

“Decomposing Demonstratives and Wh-Words”

Kunio Nishiyama (Ibaraki University)

Demonstrative/indefinite pronouns are often analyzed as bimorphemic; English *th-is*, *th-at*, and Japanese *so-ko* ‘there’ and *do-ko* ‘where’. But the patterns of the combination of the two morphemes are diverse and inconsistent. Against this background, a tripartite structure for demonstrative pronouns is proposed: Determiner-Deixis-Noun. With the assumption that the two overt morphemes are realizations of the two of the three segments in the template, a consistent analysis of the morpheme combination is obtained. As a consequence, despite their appearances, *this* and *that* do not have parallel structures: *th-is-Ø* vs. *th-Ø-at*. In a similar fashion, *so-ko* and *do-ko* do not have parallel structures: *Ø-so-ko* vs. *do-Ø-ko*. The paper also speculates on the relation between demonstrative pronouns and adnominal demonstratives.

司会 島 越郎 (東北大学)

“Lethal Ambiguity in Equative Small Clauses”

Yuko Asada (SOLIFIC, Sophia University)

This paper provides a new analysis of the distribution of equative small clauses (ESCs) as in the example: *I consider [_{SC} John Mr. Smith]. While it has been commonly assumed in the literature that exceptional-case marking (ECM) verbs like *consider* does not select an ESC (see e.g., [1]), there is evidence from Japanese that this assumption is not descriptively correct. Considering this observation, I propose that the distribution of

ESCs can be explained in terms of two independently-motivated assumptions: (i) in ECM constructions, the EPP-feature on *v* triggers overt object shift; and (ii) the existence of two potential valuators for a single probe in a structure creates a problem of “lethal ambiguity” in targeting for movement, which cancels the valuation (Bošković [2]). Finally, this proposal correctly predicts the grammaticality of the data concerning English passive and raising constructions (cf. [1]).

[1] Heycock, C. (1994) *Layers of Predication*, Garland, NY. [2] Bošković, Ž. (2009) “Unifying First and Last Conjunct Agreement,” *NLLT* 27.

「英語における制限的關係節と分裂節の統語構造と意味に関して」

本多正敏 (神田外語大学研究員)

本研究の目的は、英語の制限的關係節と分裂文の分裂節 (that 節) における再構成 (reconstruction)・定性効果 (definiteness effect) を考察し、制限的關係節は DP-CP 構造を持つものに対し、分裂節は CP 構造のみを持つもの主張を示すことである。具体的には、Rizzi(1997) らのカートグラフィー (cartography) の枠組みの下で制限的關係節における再構成・定性効果を考察した Aoun and Li (2003) に基づき、制限的關係節は再構成のみを示すものに対し、分裂節は再構成と定性効果の両方を示すという違いが、上述の節の構造の違いから導かれると提案する。また、本研究の主張が制限的關係節と分裂節が表す時制関係や意味・談話的機能の違いとも整合すると議論する。結論として、A-bar 移動を伴う節の統語構造・意味・談話的機能の共通点・相違点を捉える上で、CP を複層化するアプローチは有用であると述べる。

[1] Aoun, J. and Y.-H. A. Li (2003) *Essays on the Representational and Derivational Nature of Grammar*. [2] Rizzi, L. (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery.”

「句要素を含む語から見た形態と統語の関係」

大久保龍寛 (筑波大学大学院)

Ackema and Neeleman (2004)[1]によれば、いわゆる Phrasal Compounds (PC) (例: over the

fence gossip)は、語の中に句を含む表現として、形態部門から統語部門への一方向的な派生関係を前提とする理論では問題となる一方、両部門間に双方向的な派生関係を認める理論ではうまく説明できるとされる。本発表では、まず、PCに含まれる句に見える要素が実際には句ではないことを指摘し、この点ではPCが一方向的な派生関係を前提とする理論にとって問題となるものではないことを示す。さらに、語彙的緊密性を測るいくつかの基準から、句に見える語には、「語」と「語+」(Kageyama (2009)[2])の二種類があることを指摘し、両者の違いが分散形態論 (Embick and Marantz (2008)[3])の枠組みで構造的に説明できることを示す。

[1] *Beyond Morphology*. [2] "Isolate: Japanese" in *Oxford Handbook of Compounding*. [3] "Architecture and Blocking," *LI* 39.

第八室 (11月11日午前)

司会 片岡邦好 (愛知大学)

「自己」の領域：日英語における自己卑下発話の分析

早野 薫 (お茶の水女子大学)

Pomerantz (1984[1])は、自己卑下発話にたいする応答のあり方を、英語日常会話データを用いて詳細に示した。しかし、どのような発話が自己卑下として理解されるかについては、自明のこととして言及していない。ところが、実際の自然会話の中で自己卑下として取り扱われている発話の指示対象は、必ずしも話し手自身であるわけではない。話し手の近親者、所有物など、様々な対象が「自己」の領域に属するものとして扱われている。本発表では、日本語会話、アメリカ英語会話における自己卑下発話の事例を会話分析の手法を用いて詳細に分析し、どのような対象が、「自己」に属する、自己卑下の対象となり得るかを検討する。分析結果から、話し手の近親者や所有物を対象とした自己卑下は、日本語でも英語でも行なわれる行為であること、また、会話者達は、自己卑下発話と応答からなる連鎖を通して、誰/何が、誰の領域に属するのかを、調整、交渉していることを示す。

[1] "Agreeing and Disagreeing with Assessments" in Atkinson and Heritage (eds.) *Structures of Social Action*, Cambridge.

「アメリカ生まれのアイデンティティ構築：テクノロジーを介した日本人家族会話」

砂川千穂 (The University of Texas at Austin 研究員)

本研究では、アメリカと日本の国境をまたいで生活する日本人家族が、バイリンガル、バイカルチャルなアイデンティティを構築していくプロセスを、特にウェブカメラを介した家族会話において分析する。

社会言語学、言語人類学では、状況づけられた対面的相互行為を基軸に社会秩序を分析してきたが、昨今のテクノロジーの発展により、コミュニケーションの可能性は対面的相互行為のみならず、バーチャルな空間にも広がってきた。実際、会ったことがないにもかかわらず、ウェブカメラを介して「面会」しているために「孫—祖父母」等の人間関係ができあがっていくことが珍しくない。この点に留意し、本研究では特に言語社会化のアプローチを用いながら会話の構造、身体動作、コンピュータ画面に写る向こう側の家族の様子を包括的に考慮して、子供の英語話者、日本語話者としてのアイデンティティが会話の中で構築されるプロセスを分析する。

司会 村田和代 (龍谷大学)

「接続詞Butの相互行為上の機能について：中断された語りの再開を指標する場合」

安井永子 (名古屋大学)

本発表は、会話において他者や自己の経験が語られる場面を取り上げ、そのような語りが中断された際の再開の手続きを検討する。特に、そのような場面で頻繁に用いられる接続詞 but に着目する。Jefferson (1972[1]) は、会話内での活動の進行中、競合する活動が別の話し手によって挿入された際、中断された活動は、継続 (Continuation) か 回帰 (Resumption) かのいずれかの形で再開できると論じている。継続とは、挿入された活動を進行中の活動に取り込む形で再開することであるのに対し、回帰とは、挿入された活動

を本筋からの脱線部分として切り離した上で再開させることである。本発表では、中断された語りの再開の前に **but** が用いられる際、その再開が継続、回帰のどちらの形でどのように達成させられているかについて議論する。実際の英語会話のビデオ収録データを用いた会話分析の手法により、会話参与者自身の視点から、相互行為の実際の展開における **but** の機能を明らかにすることを旨とする。

[1] Jefferson, G (1972) "Side Sequences," *Studies in Social Interaction*, ed. by David Sudnow, 294-333, Free Press, New York.

“The Third of the List: Occasioned Social Meanings of Three-Part-List Construction” (E)

Reiko Hayashi (Konan Women's University)

Lists in natural conversation are not simply a rhetorical technique to name things. They are a semantic and sequential resource to interact. In particular, a 'three-part-list' or 'trinomial', like *It was delicious, excellent, and fantastic*, is a commonly used list unit people orient to, rely on, and use. This study analyzed a case of taxonomy list practice and explored what socio-cultural meanings the speakers co-construct with the unit. Previous findings regarding the structural aspects reveal that speakers (1) complete the threes due to the unit constraint, (2) achieve precise speaker change transition at turn construction units, (3) produce opportunities to participate in the event in relevant ways, and (4) show continuation or discontinuation of talk. In addition, this study found that the speakers treat the thirds in the list as a locus of producing cultural meanings and sequencing conversation.

[1] Jefferson, G. (1990) "List-Construction as a Task and Resource" in G. Psathas (ed.) *Interaction Competence*.

第九室 (11月11日午前)

司会 奥野忠徳 (弘前大学)

「消費を表す V on/off NP に生起する前置詞の意味論的考察」

岩井真澄 (筑波大学大学院)

前置詞 **on** と **off** は *get {on/off} the train* のよ

うに通常反対の意味を表すが、特定の動詞 (**live** や **dine**) と共起して前置詞付き動詞を形成すると、(1) *Mary lives {on/off} parents' savings.* のように良く似た意味を持つ。しかし、(2) *Mary lives {*on/off} her parents.* が示すように、これら前置詞の生起に関して何らかの制約がある。本研究はその制約を明らかにすることを目的とする。**live on/off** や **dine on/off** といった前置詞付き動詞は「主語の指示対象が前置詞の目的語の指示対象を消費する」という共通の意味フレームを持ち、前置詞 **on** と **off** は消費者と消費されるものの関係を表している。この消費という意味フレームとそれぞれの前置詞の意味を踏まえると、主張として、**on** は直接的な消費を表すために生起し、**off** は非直接的な消費を表すために生起するということが出来る。この主張は、(3) *John dances {*on/off} his parents' money.* のような動詞単体では消費という意味フレームを喚起しなくても、特定の文脈が与えられて消費を喚起する文に生起する前置詞 **on** と **off** に対しても当てはまる。

「英語における前置詞句主語構文と Aboutness に基づく主語の定式化」

三上 傑 (筑波大学 (非常勤))

英語において、主語は一般的に名詞句であるとされるが、一部の前置詞句は主語として生起することができる。この事実を説明するために、Bresnan (1994 [1])をはじめとする多くの先行研究では、これらの前置詞句が実際には名詞句であると主張されてきた。しかしながら、この NP 分析では、前置詞句主語構文の有標性はおろか、なぜ一部の前置詞句のみが主語として機能することができるのかという前置詞句主語の意味特性に対しても適切な説明を与えることができない。

そこで本発表では、これらの問題を解決するために、Rizzi (2006 [2])により提案された Aboutness に基づく主語の定式化を導入し、前置詞句主語構文の示す有標性と意味特性がこの主語の定式化の下で適切に捉えられることを示す。そして具体的に、前置詞句主語構文は、その前置詞句が有する指示性に基づき認可される有標構文であり、前置詞句主語の意

味特性もまた指示性の観点から場所と時間を表わすものに限定されると主張する。

[1] “Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar.” [2] “On the Form of Chain: Criterial Positions and ECP Effects.”

司会 大名 力 (名古屋大学)

「意味から形を見る:優先規則体系と文法における拡張のメカニズム」

大室剛志 (名古屋大学)

英語のclimbという動詞を取り上げ、その典型的な意味と非典型的な意味とを見る。その際、BNCから得られたデータを補足的に用いる。典型的な意味と非典型的な意味があるということ踏まえた上で、構文の形の方を見る。英語の非常に抹消的な構文である、’d ratherが文を直接従える構文を取り上げ、そのような抹消的な構文にも、典型的なメンバーとそこからはずれた変種があることを確認する。かなり周辺的な構文の優先規則体系のありようを観察するので、敢えて母語話者の直感には頼らずに、The Bank of Englishを用いた独自のコーパス調査から得られたデータを用いる。上で見た構文における変種メンバーがなぜ英文法で可能になっているのかを説明するために、ある種の挿入節において、基本形から変種を生み出す文法における拡張のメカニズムを探る。それにより、その変種の存在を説明する。

Culicover, P.W. (1999) *Syntactic Nuts*, Oxford.
/Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT/Mouri, Y (2012) “A Syntactic Study of the Modal Idiom *Would Rather*,” Nagoya Univ.

「項構造基盤結果構文におけるin結果句の生起について」

並木翔太郎 (筑波大学大学院)

結果構文は動詞 break などが生起する「動詞基盤」タイプと、hammer などが生起する「項構造基盤」タイプの2種類に大きく分類される (Iwata (2009))。Folli and Ramchand (2005 [1])では、in 結果句は動詞基盤タイプの結果構文にのみ生起可能であることを指摘した。しかし、本発表では、項構造基盤タイプの結果構文でも受動化している場合には in

結果句が生起可能になるという新たな事例 (e.g. The vase was hammered in pieces.)を示し、その理由を事象の展開と与えられる際立ちの違いから明らかにする。本発表では、受動文の状態解釈が、変化の過程を背景化し、変化後の状態にのみ概念的際立ちを与えるため、in 結果句がもつ、変化後の結果状態のみに際立ちを与えるという語彙意味の特徴と矛盾しないことから、項構造基盤タイプの結果構文の受動文に in 結果句が生起可能となる、と主張する。

[1] “Prepositions and Results in Italian and E: An Analysis from Event Decomposition” in H. Verkuyl et al. (eds.) *Perspectives on Aspect*.

「Be about to の用法と語用論的意味の類型化に関する一考察」

衛藤圭一 (京都外国語大学 (非常勤))

周知のように、be about to は「まさに～するところ」という近接未来の意味を表す。たとえば Leech(1987[1])の挙げる、They are about to leave. という例では、同表現がごく近い未来を表すという意味的特徴が指摘されているが、彼は改訂(2004[2])にあたって、I am about to hypnotise you. Don't be afraid! という例に差し替えている。この例からわかるのは、be about to の示す近接未来に加えて、話し手が社会上然るべき立場にあるということである。この点を踏まえ、本発表は、話し手の社会的立場によって、be about to の意味は2つのタイプに大別できることを語用論の立場から主張する。あわせて、類義表現とされる be going to との比較、実例の観察、インフォーマント調査を通し、これまでに指摘されていない用法を明らかにした後、より精緻化した語用論的意味の類型化を試みる。

[1] Leech, Geoffrey (1987) *Meaning and the English Verb*. [2] Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*.

第十室 (11月11日午前)

司会 松本マズミ (大阪教育大学)

“On the A/A-Bar Distinction in Tough-movement and Its Parametric Syntax”

川崎早苗 (関西学院大学大学院)

生成文法理論初期から難易構文 (*tough construction*(TC)) の統語的特異性については盛んに研究がなされ、当時は TC が NP-movement (or A-movement)でもって生成されると分析されていた(Postal 1971 など)。しかし、Chomsky(1977)が TC の生起条件と *wh*-movement (or A-bar movement)の生起条件との一致するという事実の発見以来、TC は A-bar movement でもって生成されるということが広く認められてきた。しかし、上記の事実の発見だけからでは、TC が A-movement で生成されないということを論理的に排除したことにはなっていない。本論では、TC が A/A-bar movement のどちらによっても生成され得ること、及びその生成法の選択には地域的方言差ではなく個人的方言差が存在すること、の2点を TC に関連する様々な統語現象の分析を通して示すことを目指す。更に、これら2点の主張が正しければ、従来の研究では説明が困難であった TC の統語的特異性が過不足なく説明できることも併せて示していく。

[1] Chomsky, Noam (1977) “On Wh-Movement” in Peter Culicover et al. (eds.) *Formal Syntax*, 71-132, New York: Academic Press.

「Tough 構文の主節構造について」

中川直志 (中京大学)

本発表では、(1)のような *tough* 構文における主節形容詞の構造的な位置について論じる。

(1) John is easy for Bill_i [PRO_i to please].

仮に *tough* 類形容詞が AP の主要部にあって、その後一切移動しないと考えると、主節の要素である *for*-NP の統語構造上の位置を保証することができない。そこで本発表においては、A 主要部に併合された *tough* 類形容詞が TP と AP の間に介在する機能範疇(Belletti (2004[1]))の主要部に移動すると主張する。

さらに、*tough* 類形容詞が、その補部の削除を容認できる点で否定辞と機能を共有していることから、従来の NegP を DEGP に読み

替え、*tough* 類形容詞が DEG またはそれに最も近接する主要部まで移動することによって、T と関係づけられなければならないと主張する。これにより、*tough* 節の削除を動詞句削除と同様の原理(Lobeck (1995[2]))に還元することが可能となる。

[1] “Aspects of the Low IP Area” in L. Rizzi (ed.) *The Structure of CP and IP*, Oxford University Press. [2] Lobeck (1995) *Ellipsis*, Oxford University Press.

司会 縄田裕幸 (島根大学)

「Phase 理論からみる動名詞構文」

下仮屋 翔 (九州大学大学院)

動名詞構文が顕在的な主語を備える場合、対格または属格の形態をとるとされる。その両例の振る舞いには共通点が見られるものの、幾つかの相違点も観察されていることから、対格動名詞と属格動名詞は異なる統語構造を有するものと考えられる。そこで本発表では、両構文の統語的特徴と分布に関して、Phase 理論に立脚した独自の提案を行うことにより原理的説明を試みたい。

具体的には、まず対格動名詞を TP 構造と見做す Pires (2006 [1])の問題点を明らかにし、その上で本構文の時制が未指定であることを鑑み Phase を形成しない CP 構造を想定する。他方、属格動名詞については、経験的事実に基づき Abney (1987)などの分析を修正した DP 構造を想定するとともに、節と名詞句の構造的平行性の観点から、本構文が Phase を形成すると主張する。そして、以上の分析を通じて、*wh* 抜き取りにおける容認可否の対比などにも自然な説明が与えられることとなる。

[1] *The Minimalist Syntax of Defective Domains: Gerunds and Infinitives*. [2] “Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories.”

「Have/Take an N 構文について」

久米祐介 (名古屋大学研究員)

現代英語には、*have* がイベントを示す目的語を選択する *have a walk* のような構文があり、Wierzbicka (1982[1])、Dixon (1991[2])、秋元 (2002[3])などによって、次のような特徴が観

察されている。まず、イベントを示す目的語は接辞を伴わない動詞派生名詞であり、定冠詞や属格代名詞ではなく不定冠詞と共に現れる。次に、have にはほとんど意味がなく、目的語の動詞派生名詞が意味の大部分を占めており、動詞派生名詞の意味上の主語は have の主語と同一であると解釈される。また、take も have と同様にこのような特徴を持つ動詞派生名詞を目的語に取るが、take は have が選択する全ての動詞派生名詞を選択できるわけではない。本発表では、これらの構文が英語史においていつどのように生じたのか、そしてどのような過程を経て現代英語で観察される特徴を持つようになったのかを、歴史コーパスから得られたデータを分析することによって、統語構造の変化と have と take の文法化の観点から議論する。

[1] “Why Can You Have a Drink When You Can’t *Have an Eat?” Lg58. [2] *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. [3] 『文法化とイディオム化』

〈公開特別シンポジウム〉

A 室 (11 月 10 日午後)

“Language, Cognition, and Human Nature: Prospects of Linguistics” (E)

Yukio Otsu (Keio University)

Moderator: Yukio Otsu, Keio University

Speakers: Cedric Boeckx, CREA/University of
Barcelona
William Croft, University of New
Mexico
Lyle Jenkins, Bilingualism Institute,
Cambridge, MA

Discussants: Akira Watanabe, University of
Tokyo
Seizi Iwata, Osaka City University
Tetsuya Sano, Meiji Gakuin
University

In this special symposium celebrating the 30th anniversary of the English Linguistic Society of

Japan, we will discuss the future of linguistics from various points of view.

Speakers from abroad represent various aspects of present-day linguistics, including generative grammar, cognitive linguistics, biolinguistics, and typology among others.

In the first part of the symposium, each speaker will tell us about their own interest, what linguistics has achieved during the last 30 years, and the future prospects of linguistics from their own perspective.

The three designated discussants will then discuss topics raised in the first part, and discussion among speakers and discussants will follow.

We also plan to discuss in which aspects and/or in what ways *English* linguistics can contribute to the future of linguistics.

“Not Chomskyan Enough” (E)

Cedric Boeckx (ICREA/
University of Barcelona)

For a Chomskyan, Language, Cognition, and Human nature are near-synonyms: to understand human nature, one has to understand the nature of the language faculty and the specific cognitive profile the latter gives rise to. And yet in practice most linguists of a Chomskyan persuasion often study language ‘in isolation’. In this talk I will illustrate what I mean by this, and will argue in favor of a more interdisciplinary, less-philology-oriented approach to language. Such an approach can be called biolinguistics, although part of the talk will be devoted to showing how the way I understand the term differs in important respects from the target of criticisms raised at it.

“Studying Language as a Complex Adaptive System” (E)

William Croft (University of New Mexico)

My research has been conducted in seemingly diverse aspects of language: construction grammar, typology, semantics and evolutionary models of language change. Yet they are different facets of a

view of language as a process embedded in human social interaction, which produces diversity and leads to evolution of language. This view emerges from (relatively) recent developments in construction grammar, the usage-based model, a verbalization perspective on grammar, and progress in typological analysis (which has in turn led to great improvements in language documentation). A better understanding of language as a complex adaptive system will emerge with further documentation of endangered languages; verbalization studies; the integration of sociolinguistics and usage-based models; more detailed analyses along the lines of FrameNet; and more use of quantitative methods in linguistic analysis.

“Emergence and Prospects of Biolinguistics as a Natural Science” (E)

Lyle Jenkins (Biolinguistics Institute,
Cambridge, MA)

In recent decades linguistics has focused on the study of language from a biological perspective. An intensive study of the English language (syntax, morphology, semantics, phonology, phonetics, etc.) was initiated to answer questions about the form, function and acquisition of language. Thus the English language has played a role in linguistics in much the same way as the bacterium *E. coli* played a pivotal role in molecular biology as a “model organism.” This strategy made sense, since, if language was part of our genetic endowment; i.e., rooted in human nature, then we would expect to find common features in all languages of the world. Similarly, molecular biologists expected to and did find related genetic mechanisms in organisms other than *E. coli*.

This was followed by an explosion of research across many languages to shed light on the diversity of language, to understand in what ways the general principles of language can vary parametrically from language to language; e.g., word order differences between English and Japanese and other languages.

Once one had detailed models and some

understanding of the faculty of language and how a speaker acquires language, one could ask how language evolved in the human species and raise the comparative question as to what antecedents language might have in other species. Finally, we can better study the similarities and differences between language and other cognitive systems.

We will review some of the progress we have made toward a theory of the biology of language in recent years, consider some open questions and the prospects and avenues for future research.

〈特別ワークショップ〉

B 室 (11 月 11 日午前)

“Current and Future Issues in Biolinguistics” (E)

Koji Fujita (Kyoto University)

Language is one major biological trait unique to our species, and biolinguistics ([1]-[4], a.o.) is a highly interdisciplinary approach to the topics centering on the design, development and evolution of this remarkable human capacity, with the ultimate goal of elucidating human nature. This special workshop invites four leading scholars to discuss some of the ongoing issues and future prospects of modern biolinguistics from different but interconnected perspectives. Our central aims here are: (1) to offer a compact overview (though inevitably selective) of the extremely wide range of research agenda of biolinguistics, from theoretical linguistic to comparative neurobiological and philosophical investigations, and thereby (2) to encourage interested researchers with various academic backgrounds to seriously consider what contributions they will be able to make to the future progress of this ever-growing field.

[1] Jenkins, L. (2000) *Biolinguistics*. CUP. [2] Larson, R.K. et al. eds. (2010) *The Evolution of Language*. CUP. [3] Di Sciullo, A.M. & C. Boeckx eds. (2011) *The Biolinguistic Enterprise*. OUP. [4] Boeckx, C. et al. eds. (2012) *Language*,

from a Biological Point of View. CSP.

“Biolinguistics: Current State and Future Prospects” (E)

Lyle Jenkins (Biolinguistics Institute,
Cambridge, MA)

Biolinguistics, the study of the biology of human language, investigates the standard fields of inquiry common to all biological disciplines: form/function, development (in the individual) and evolution (in the species).

In recent years there has been an explosion of research in a variety of fields; e.g., studies of sound, structure and meaning in the languages of the world, studies of genes involved in human language (and other animal communication systems), brain imaging studies of language areas, computer simulation of language evolution, to name only a handful.

In addition, biolinguistics studies how the biology of human language relates to other human cognitive systems and to systems in other species. Beyond that it asks how principles of language are integrated into other natural sciences (the “unification problem”). We will review the current state of these issues, as well as their future prospects.

“The Language Design Factors in Syntactic Construction Design” (E)

Heizo Nakajima (Gakushuin University)

As generative grammar inclines to biolinguistics, the impression might arise that it is not concerned with the traditional empirical study of languages any more. However, it is not the case; we need to examine assumptions and/or hypotheses made by biolinguistics on the basis of linguistic facts.

As an example of the assumptions in biolinguistics, I bring up Minimality, a candidate for a principle of the “third” design factor, to show that the principle is crucially involved in the syntactic design of the passive construction. Specifically, I will argue that Minimality subsumes the constraint to be called the Closest NP Constraint on Passivization, the fact that

unaccusatives are unpassivizable, and the long lasting issue that some transitive verbs are unpassivizable. The biolinguistic perspective will shed fresh light on the analyses of syntactic constructions.

“On the Nature of the Naturalistic Approach in Biolinguistics” (E)

Masanobu Ueda (Hokkaido University)

Chomsky [1] characterizes biolinguistics as a naturalistic approach to the study of language, which “seeks to construct intelligible explanatory theories, taking as ‘real’ what we are led to posit in this quest, and hoping for eventual unification with the ‘core’ natural sciences: unification, not necessarily reduction.” Conceptual discrepancies, however, have been noted between biolinguistics and other biological sciences. Poeppel and Embick [2], for example, discuss two conceptual discrepancies between linguistics and cognitive neuroscience, dubbed the Granularity Mismatch Problem (GMP) and the Ontological Incommensurability Problem (OIP). This talk examines these and other conceptual discrepancies in the broader perspectives of the philosophy of science and of behavioral biology, and attempts to elucidate the nature of the naturalistic approach in biolinguistics.

[1] Chomsky, N. (2000) *New Horizons in the Study of Language and Mind*, CUP. [2] Poeppel, D. and Embick, D. (2005) “Defining the Relation between Linguistics and Neuroscience,” *Twenty-First Century Psycholinguistics: Four Cornerstones*, Lawrence Erlbaum.

“Limitations in the Artificial Grammar Learning (AGL) Paradigm and New Directions in Cognitive Biology of Language” (E)

Kazuo Okanoya (The University of Tokyo)

Recursion had been the focus of debate for past 10 years since the publication of the influential paper [1]. The AGL paradigm was initially used to assess limitations in linguistic ability in non-human animals [2] but it was later wrongly

applied to the question of recursion [3]. After these confusions, we noticed that this paradigm can only be used to test perceptual pattern learning, which may or may not be related with language [4,5]. We now propose merge and meta-cognition as new directions to be focused. Merge is essential in forming hierarchy both in meaning and form. Meta-cognition is essential in bridging the self with the world.

- [1] Hauser et al. (2002) *Science* 298, 1569-1579.
- [2] Fitch & Hauser (2004) *Science* 303, 377-380.
- [3] Gentner et al. (2006) *Nature* 440, 1204-1207.
- [4] Berwick et al. (2011) *Tr Cog Sci* 16, 113-121.
- [5] ten Cate & Okanoya (2012) *Phil Trans R Soc B* 367, 1984-1994.

C室 (11月11日午後)

“A Special Workshop on the Basic Operations of Syntax” (E)

Naoki Fukui (Sophia University)

What are the basic operations of human language syntax, and what is their nature? Merge is generally taken to be an indispensable structure-building operation. Is this true, and if so, then what is the nature of Merge? How is it grounded in biolinguistic considerations? Are there other indispensable operations in syntax? If so, what are they, and what is their nature? These are some of the fundamental issues central to current linguistic theorizing. This workshop will address these issues. Cedric Boeckx will talk about the very nature of Merge from the biolinguistic perspective. Hiroki Narita and Masakazu Kuno will present some of the collaborative research results of our CREST-Kaken Research Group, and will mainly discuss the issues of No-Tampering Syntax and *Search*, a proposed general operation unifying various miscellaneous operations assumed in the past literature.

“On Merge: Biolinguistic Considerations” (E)

Cedric Boeckx (ICREA/
University of Barcelona)

In the context of the minimalist program the

goal of theorizing has become that of reconstructing grammar around Merge. But what is Merge? The literature offers a fair amount of competing definitions. It is the purpose of this talk to examine the validity of these in light of biolinguistic considerations. The evaluation will proceed in two steps: the first, a discussion of the possible applicability of merge outside of natural language; the second, an attempt to ground Merge into the realm of possibilities envisaged in mathematical biology.

“Towards No-Tampering Syntax” (E)

Hiroki Narita (Waseda Institute
for Advanced Study)

The theory of bare phrase structure (Chomsky 1995 et seq.) holds that the elementary set-formation operation Merge is the only generative device for syntactic structuring. Since Merge just recursively combines syntactic objects without modifying their internal structures, it trivially satisfies the No-Tampering Condition (NTC), which prohibits deletion/modification of generated structures in the course of linguistic derivation (Chomsky 2008). A question naturally arises as to whether other operations of linguistic computation also strictly satisfy the NTC. In addressing this question, this talk will offer a close scrutiny of various syntactic operations proposed in the past literature. The discussion will lead to the conclusion that a theory of syntax with no NTC violation is indeed within our reach, while it will require a number of important modifications on the inventory of operations in linguistic computation.

“Merge and Search” (E)

Masakazu Kuno (Waseda University)

In this presentation we address the question of what the basic operations of syntax might be. We assume that Merge (or its equivalent) is an indispensable operation to build syntactic objects. However, it is also clear that Merge alone is not sufficient to establish all the relations required by SEM. Thus, we put forth the hypothesis that

syntax is equipped with another general operation called *Search*, as demanded by the requirements of SEM. We argue that *Search* unifies the syntactic operations that have been proposed to deal with various specific cases. We particularly examine Agree, Labeling and chain formation, in an attempt to see if these operations are indeed to be unified under *Search*. We also claim that any operation that falls outside of *Search* (and *Merge*) needs to be re-examined, thereby setting the new standard for explanatory adequacy.

D室 (11月11日午後)

“Special Workshop: Typology of Event Semantics and Argument Encoding” (E)

Toshio Ohori (University of Tokyo)

The semantic structure of verbs and the ways in which various facets of the event are encoded in lexicon and grammar have been one of the central issues in the study of language (Fillmore, Jackendoff, Dowty, Hopper & Thompson, Foley & Van Valin, Croft, Talmy, among others). The goal of this workshop is to further our understanding of the variability of argument encoding and to search for a typologically viable research framework for its analysis. The panel will explore such issues as: the interaction of aspectual and causal structures in the semantics of events; the directed vs. undirected opposition and its reflexes in resultative constructions; the place of onomatopoeic words in the theory of event semantics; the status of deictic elements in the framing typology of motion expressions. The panel will consist of three paper presentations and a discussion session.

“Directed Change, Manner and Result Verbs, and Resultatives” (E)

William Croft (University of New Mexico)
Verbs: Aspect and Causal Structure (Croft 2012) presents a three-dimensional representation of the aspectual and causal structure of events as they are relevant to argument structure and related constructions. I present here an aspectual category

of directed change that cuts across the Vendler aspect categories (and the Mourelatos analysis). I argue that the aspectual contrast between directed and undirected change underlies at least two basic grammatical contrasts discussed by Rappaport Hovav and Levin. Manner verbs are best analyzed as undirected change predicates, while result verbs are best analyzed as directed change predicates. Simple resultatives represent a construal of an event as an directed change ending in a transition to a result state, while complex (Fake NP and Fake Reflexive) resultatives represent a construal of an event as an undirected change ending in a transition to a result state.

“A Frame-Semantic Analysis of the (Limited) Flexibility of Mimetic Verbs” (E)

Kimi Akita (Osaka University)

This paper investigates the limits of innovative uses of mimetic, sound-symbolic verbs in Japanese. [1] points out the frame-based fluidity of the meaning and argument structure of mimetic verbs (e.g. *rebaa-o gatyagatya su-* ‘clank a gearshift’), whose conventional uses are restricted to less iconic, intransitive ones (e.g. *nikoniko su-* ‘smile’) [2]. Based on a questionnaire and some corpus data, I illustrate that frame semantics also accounts for the unlikely uses of mimetic verbs, such as *nyaanyaa su-* as a causative sound-emission verb meaning ‘make meow’. The discussion is consistent with the distribution of transitive/intransitive uses of English sound-emission verbs (e.g. *clatter, squawk*) in corpora reported in [3].

[1] Tsujimura, N. (2009) “Reexamination of the Meaning and Argument Structure of Mimetic Verbs,” (J), *KLS* 29. [2] Akita, K. (2009) *A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese*. PhD diss., Kobe U. [3] Levin, B. et al. (1997) “Making Sense of Corpus Data,” *Int’l J of Corpus Linguistics* 2.

“How to Express Deictic Information in Encoding Self-/Non-Agentive and Agentive Motion in English and Japanese” (E)

Hiroaki Koga (Keio University)

The aim of this paper is twofold. First, on the basis of parallel corpus data, we demonstrate that Japanese tends to express deictic-path information (DP, hereafter) more frequently than English in encoding self-/non-agentive motion and that this tendency is adequately accounted for by their language-specific morphosyntactic properties. Second, we probe into the ways in which Japanese and English include DP in caused-motion expressions. In both languages, caused-motion expressions typically lack DP (in particular, DP expressed by a verb), except for accompanied motion (e.g., *mot-te iku/kuru*). Focusing on Japanese, we attempt to explain the reason for the infrequent or sheer absence of DP expression in caused motion and show that, despite the lack of morphosyntactic means to express DP, Japanese tends to construe caused-motion events from the speaker's perspective through another means, viz., direct/inverse-voice oppositions (Koga 2008; Koga & Ohori 2008; Shibatani 2003).

